

タイから学ぶ、東南アジアの水産養殖

資源エネルギー環境部 環境・リサイクル課

TEL : 082-224-5676

■初めまして？いえいえ、お会いしています

突然ですが、下のエビたち。それぞれの名前をご存じですか？



正解は左から、クルマエビ、ブラックタイガー、バナマイエビです。全問正解できた方は少ないのではないのでしょうか。実はこの3種類の海老、どれもクルマエビ科に属しています。

さて、特にバナマイエビ。聞き慣れない名前ですね。初めて見たという方もいらっしゃるでしょうが、果たして本当にそうでしょうか？

現在、バナマイエビは日本にも大量に輸入されていて、今やブラックタイガーに取って代わる勢いなのです。スーパーでは、白エビもしくはホワイトエビという名前でよく並んでいるようです。意識しないうちに、食卓に登場しているかもしれません。

■水循環技術でエビ養殖

なぜいきなりエビの話から始まったのか、その前に当局の調査事業について説明する必要があります。

平成19年度より、当局では水循環技術を持つ中国地域企業の海外進出の可能性について調査を実施して参りました。今年度は、「ベトナム及びインドネシアにおける水ニッチビジネス展開プロジェクト具現化モデル調査」を実施しています。

(1)現地で役立つプロジェクトの構築、(2)国内外の人的・組織的なネットワークの構築、(3)グローバル人材の育成、この3点に狙いを定め、ベトナム・インドネシアそれぞれを進出対象としたプロジェクト研究会を5回ずつ開催予定です。平成24年7月31日には、両国の第1回研究会が開催されました。

そのうち、ベトナムプロジェクトの研究会においては、養殖場等への技術導入に向けて具体的なプロジェクトの構築を目指しています。

2009年のベトナムの輸出額を見ると、水産業は縫製品・原油に次ぐ第3位で、基幹産業の一つとなっています。また、水産業の生産量のうち、養殖業は半数を超えています（およそ260万トン）。

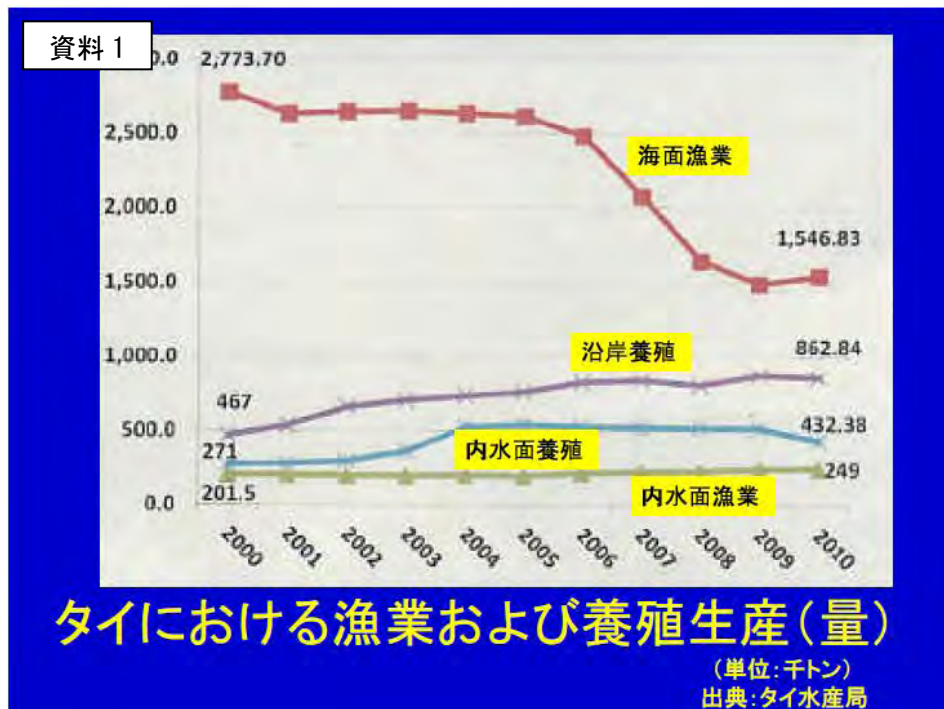
第1回研究会では、水産養殖の実態を学ぶべく、(独)国際農林水産業研究センター水産領域長 前野幸男様をお招きし、「東南アジアの水産養殖」をテーマに御講演いただきました。

今回は、その内容を少し御紹介したいと思います。

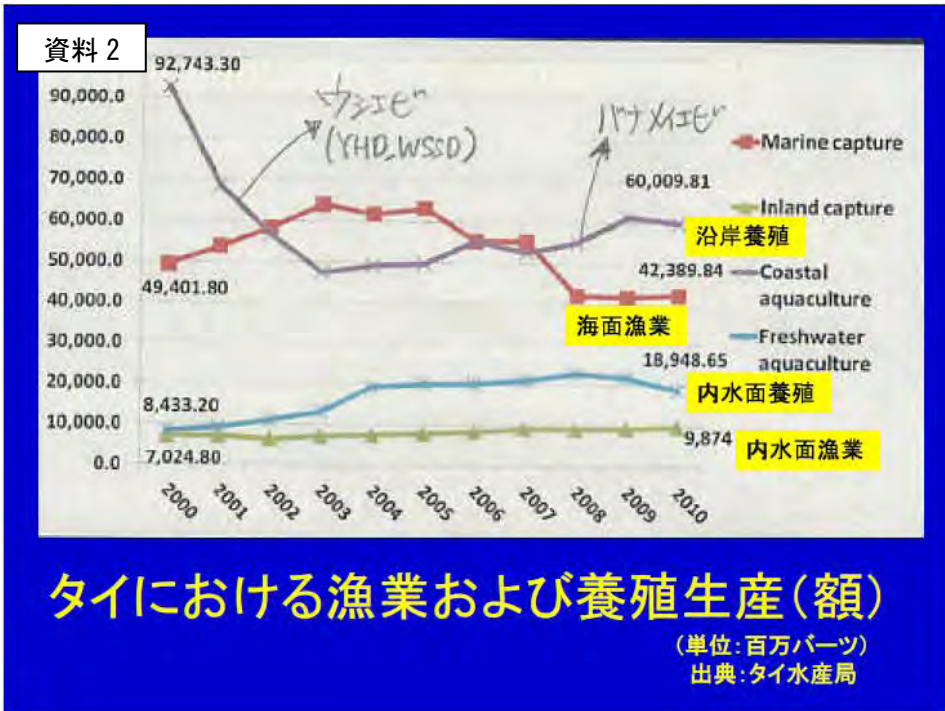
■東南アジアの水産養殖

前野水産領域長の御講義では、東南アジアの中でも世界の漁業・養殖業生産国トップ10であるタイを中心にお話いただきました。

タイの漁業・養殖業の総生産量は309万トン、そのうち養殖業は42%です。さらに養殖業のうち、内水面養殖が14%、沿岸養殖が28%です。資料1の生産量を見ると、両者とも海面漁業の生産量には及びません。

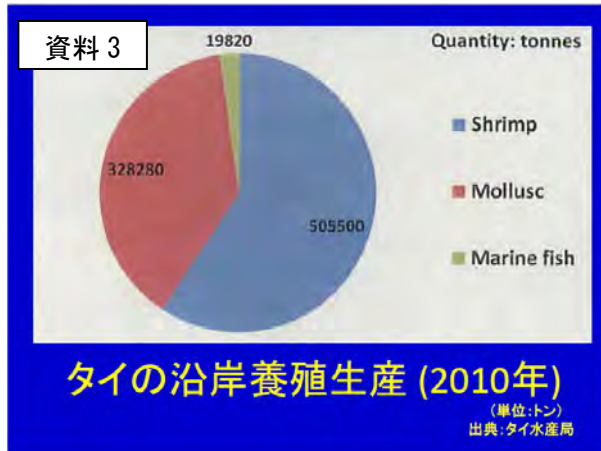


ところが、生産「額」を見ると、沿岸養殖が海面漁業を上回っていることが分かりません。(資料2)



では、その沿岸養殖で養殖されている魚種はどういったものがあるのでしょうか。代表的な魚種は、エビであればバナメイエビやブラックタイガー、魚類であればシーバスやハタ類だといいます。

エビはタイの沿岸養殖生産の中でも、半数以上を占めています。(資料 3 : 円グラフ青色部分)



ブラックタイガー



バナメイエビ



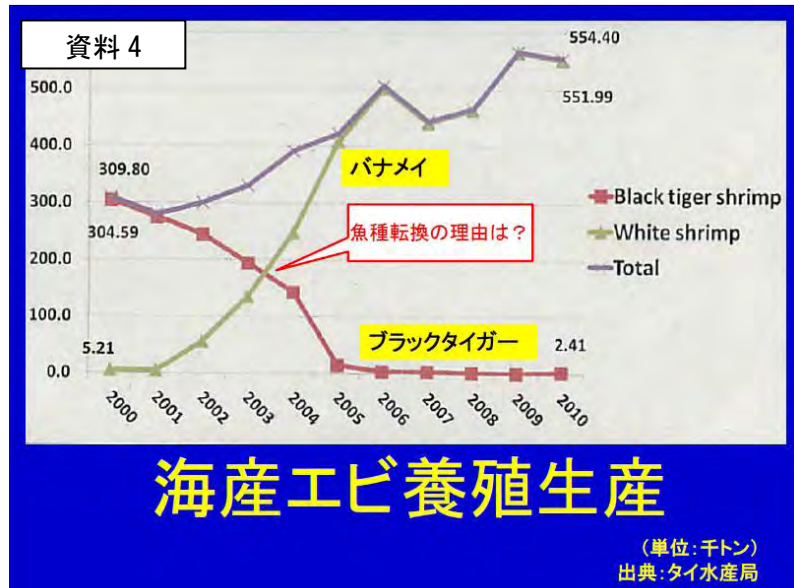
ハタ類

ここまでのタイの例を見ると、エビ養殖は、他の漁業や養殖に比べて、単価が高く稼げる部類と言えそうです。

タイの海産エビ養殖において、最近現れた大きな変化は、魚種の転換です。

資料4によると、2003年頃を境にブラックタイガーからバナメイエビに転換しています。

この主な原因は、エビの病気にあります。



エビの病気には、ウイルス病の他に、細菌性疾病のピブリオ病、寄生虫病などがあります。中でもウイルス病は、致死率が80~100%と非常に高く、影響が深刻です。タイでは、1995~7年頃にブラックタイガーのウイルス病被害がピークに達しました。

そんな中、2002年に普及したのが、中南米産のバナメイエビです。バナメイエビは、病気に強く、成長も早いいため、養殖コストはブラックタイガーの半分と言われています。2006年には、エビ生産の99%がバナメイエビになりました。

が、いくらバナメイエビが病気に強いといっても、完璧ではありません。2006年には、バナメイにも疾病が発生しています。



ウイルス病の実態は明らかになっておらず、疾病をゼロにすることは困難です。

東南アジアのエビ養殖現場では、養殖前に、汚泥排出→乾燥→石灰処理→塩素処理といった方法で対策がとられています。それでも感染の兆候が見られる場合は、いったん排水し、無事なエビを取り急ぎ収穫します。

しかしながら、こうした対処法では、あまり効果はあがるとは考えられず、根本的な解決法が求められています。

■チャンスを探して

前野水産領域長は、最後に、今後の養殖展開について次のとおり述べられました。

今後の養殖展開に影響をおよぼす制約要因

- ・健苗育成
- ・疾病
- ・高生産コスト
- ・飼料原料への需要の高まりと価格高

今後の養殖展開においてキーとなるもの

- ・養殖適地の選定
- ・対象種の多様化への対応
- ・適正な飼育管理技術
- ・養殖業者の技術向上(技術普及,人材育成)
- ・国際標準に適合した養殖管理に関する指導

上記のような制約要因には必ずニーズがあるため、その解決策にビジネスチャンスがありそうです。今回の調査の場合、養殖場等への水処理技術導入により、健全な魚類の育成・疾病数の減少、安定した収穫を提供できれば、ビジネスにつながる可能性が出てくるわけです。

エビに限って言えば、今や日本の食卓に欠かせない食材。より健全でより美味しいエビが食べられれば、日本の私たちにとっても嬉しいことです。

■最後に

話変わって、右の魚をご存じですか？

これはナマズ類パンガシウス科の魚で、「チャー」などと呼ばれています。日本のナマズとは似ても似つかない外見ですね。



ナマズは、ベトナムでは年間100万トン以上生産されているメジャーな食用魚です。

調理法は、フライ、ムニエル、ポワレなど。筆者もベトナムでフライを食べたことがあります。ふんわりした食感でクセがなく、美味しい白身魚でした。欧州・中東・東南アジア向けに、輸出もされています。

市場規模を考えると、エビ養殖に限らず、ナマズ養殖をターゲットにすることもできそうです。

日本でも一部の地域で食用ナマズが養殖されていますが、それ以外ではナマズを食べる習慣はありません。国が違えば食文化も違い、それに伴うニーズも違ってくる。まず現地を訪れ、文化を知ることが重要です。ビジネスの種はどこに転がっているか分かりません。

当調査でも、インドネシア・ベトナム両国において現地F S調査を予定しています。

今後、研究会開催やF S調査を重ねて、引き続きビジネス展開の可能性を探っていく予定です。